

生理活性物質探索病態解析分野 研究室配属感想文

学籍番号

名前

今回私は生理活性物質探索病態解析分野の研究室に配属され、2つの実習を経験した。

1つ目の実習内容は、PCR法でDNA断片を増幅させる・大腸菌培地にてTAクローニングを行う・プラスミド精製を行う・制限酵素反応を起こしてインサートチェックを行う、などであった。私は、これらの実習のほとんどを医科生化学の実習で既に経験していた。そのため、本来ならば先生の指導を受けなくても実習を進めることができる状態ではないかならなかったのだが、私はほとんど実習内容を覚えておらず、先生の解説講義なくして実習を進めることはできない状態になってしまっていた。1度目の実習に対して軽薄な姿勢で臨んでしまったため、私は実習を全く実にすることができていなかったことを痛感した。そして、そんな過去の自分を恥じるとともに、実習内容を理解して取り組む方が実習が楽しくなることを知った。今回の実習では、作業の直前に先生が解説講義を行ってくださったおかげで、自分が行う手技がどんな意味を持つのかを頭の中で思い返しながらかつ実習を進めることができた。「この作業では、細胞塊を形成している」「この溶液は、～のために加える」などと頭の中で呟きながら進めると、不思議と実習に対する好奇心が湧いてきた。このような経験から、研究を行う際には、研究内容に対する確かな知識と好奇心が必要であると感じた。

2つ目の実習内容は、細胞増殖と増殖させた細胞を利用した薬剤選別である。具体的には、細胞の継代やCell Countなどの手技を行った。この実習は過去に経験がなく、手間取ってしまうことが多かったように思う。スペースの限られたクリーンベンチ内での作業は、慣れない私にとって困難であり、扱う器具はデリケートなものばかりで神経をすり減らすような思いであった。一連の作業を通して、細胞を扱う上で重要とされたのは、いかに細胞にストレスを与えず清潔に保つか、ということであった。研究で細胞株などを利用する研究者は、常に細かな気を配らなければならないということを実感した。しかし、少なくとも今回の実習で経験した手技に関しては、私はとても面白いと感じ、「またやってみたい」という気持ちになることができた。私にもう少し繊細ささえあれば、研究者向きであったかもしれないと感じることができた。

私はもともと患者さんとの触れ合いを大切にする医者を目指して宮崎大学医学部医学科に入ってきたため、今まで「研究」とい分野には全く興味をもっていなかったが、今回の実習を経験したことで、初めて研究に関心を持つことができた。今回、このような機会を与えてくださった加藤丈司教授、そして様々な知識を与えてくださった桑迫健二准教授に感謝の意を示したい。本当にありがとうございました。